

突撃インタビュー

編集部ハルちゃんが行く！

ハルちゃんって誰？



本誌の編集担当者。9月にアマオケでマーラーの交響曲3番をやるので、先月から練習開始です。しかし楽譜に書いてあるドイツ語の指示がまったくわからん…。苦悩してたらコンサートマスターが和訳を書きこんだPDFを送ってくれました。これでマーラーが何言ってるかわかるわ！と喜んでたのですが、「神秘的におびえる」とかの和訳もあってナゾは深まるばかり。果たして9月までに神秘的に怯えた演奏ができるようになるのかしら!?

連載80回目となる今回は、バリ取りや研磨の自動化において、次々と革新的な挑戦をされているジーベックテクノロジーさんに突撃取材！バリ取りの奥深さについて、基礎から教えていただきました～☆

第80回目 株式会社 ジーベックテクノロジー



〒102-0083 東京都千代田区麹町4-3-3新麹町ビル4階
TEL (03)3239-3481
<http://www.xebec-tech.co.jp>

お話を伺った方



代表取締役社長

住吉 慶彦 氏



開発課 兼
プロジェクト推進室
マネージャー

内田 清隆 氏



開発室
マネージャー

佐藤 洋一 氏



工法開発
センター長

岡田 浩之 氏

□■ 今回のお題：バリ取り ■□

社名の意外な理由とは!?

ハル:御社はセラミックファイバーを使って、従来の方法とは異なる新しい砥石・バリ取りツールを提供されているそうですね。製品についてはのちほど詳しくお伺いするとして、まずは御社の沿革から教えていただけますか?「ジーベック」って初めて聞いた単語なのですが、バリに関連する言葉なのでしょうか。

住吉:いえ、ジーベック(XEBEC)はラテン語で、14世紀に地中海で活躍した3本マストの帆船のことなんです。

ハル:意外な社名でした!でもなんでまた、バリ取りの社名が帆船!?

住吉:この船は3つの帆を効率よくはたらかせることで目的地に向かってハイスピードで航海をしていた、当時としては画期的な設計の船だったのです。わが社が事業を推進していくにあたり、素材メーカー、製造業者、そして販売業者がそれぞれ高い技術やノウハウを駆使し、相互に協力しながらハイスピードで目的地、すなわちお客様の満足と信頼を得ることを目指すことが必要です。また企業内では、株主と経営者、従業員がお互いの役割を尊重しながら社会に大きな価値をつくりあげていくこと。これらの思いをこめてつけられた社名なんです。

ハル:なるほど...!深い意味がこめられているんですね。不躰な質問かもしれませんが、住吉社長はまだお若く見受けられますが、若くして社長になられた背景をうかがってもよろしいですか?

住吉:私はアメリカ生まれで、5歳から日本にきました。大学では電気工学を専攻し、修士課程まで進んだのですが、このころは自分で研究開発をしてベンチャー企業を立ち上げようと考えていたのです。

ハル:ええっ、すごい!

住吉:学生時代は将来に備えてベンチャー企業でアルバイトをしていたのですが、そこで反面教師的な意味も含め、厳しい状況を目の当たりにしまして。まずは実力をつけようと、三井物産に入社しました。ところが何を間違ったか「紙の原料」という自分の専門とはまったくちがう部署に入れられました(笑)。その後、ナノテクベンチャーの立ち上げプロジェクトに参加することになったのです。

ハル:ご卒業後すぐにベンチャー企業を立ち上げることはなくても、やはり住吉社長にその才があったからこそ抜擢されたのでしょうか。

住吉:そんななか、ジーベックテクノロジーの創業者である父が他界したのです。はじめは跡を継ぐ気持

ちはなかったのですが、その後自分の中で経営に携わりたいという思いが募っていったときに、父の後に経営を担ってくださっていた方から「手伝ってくれないか」とお声をかけていただき、ジーベックへの転身を決意したのです。父が生涯をかけてつくろうとしていたもの、そして父亡き後もその思いを継いでよりよい製品をつくろうとしている社員の皆さんの姿を見て、私もこの会社でよりよいものを世の中に生み出していく一助になりたいと思いまして。

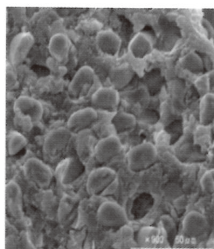
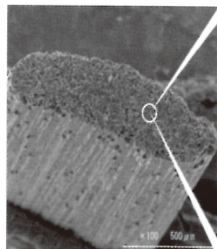
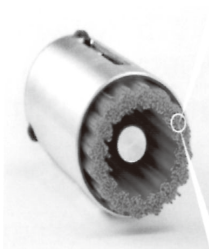
ハル:すごいなあ...。しかも、社長がそれまでに身につけられてきたことが、すべて生かされる選択ですね!

セラミック砥石ってナニ?

ハル:御社は麹町にある本社のほかに拠点をもちますが、それぞれどのような役割があるのですか?

内田:本社は営業・マーケティングや一般業務がメインです。長野では化学メーカーと共同で、素材面からの開発・製造を手がけています。東京都蒲田にあるジーベックプラスは、いわゆる東京の開発拠点。より市場ニーズに対応した開発ですね。ジーベックプラスが入っているビルは、いわば大田区の工業アパートでさまざまな企業が入っているんですよ。

カッティングファイバーは、
1本の線材に1000個の切れ刃を持っています。



線材先端SEM写真

左図は、ジーバックテクノロジーさんが誇るカッティングファイバーの線材と構造。ナイロンブラシ比60倍の高い研削力のほか、切れ刃となるブラシ先端が「金太郎飴」のように常に突出し、最後まで研削力が変わりません。加えて、歯ブラシのように広がらず、ストレート形状を維持する変形しないブラシ。業界で「画期的」と賞賛されるだけのことはありますね！

ハル:今回はこのジーバックプラスでお話をうかがっているのですが、こんなビルがあったのか、とびっくりしました！しかもおしゃれな建物だし...

内田:異なる文化やコンセプトが交差するところではアイデアが生まれやすいといわれています。いわゆるメティチ効果ですね。それをふまえてこの拠点をつくったのです。

ハル:びっくりしたといえば、ジーバックプラスに一歩足を踏み入れた途端目に入ってきたお洒落なバーカウンターにも驚いたんですが...

佐藤:そうでしょうね、初めていらした方は、皆さん驚かれます(笑)。あれはserendipityを生み出す場所としてしつらえてあるのです。

ハル:せ、せれ...?

佐藤:セレンディピティ、何かを探しているときに、探しているものとは別の価値あるものを見つける能力・才能を指す言葉です。仕事が終わってバーカウンターで仕事仲間やお客さんとくつろいでいるとき、ふとした偶然やきっかけから新しいアイデアやひらめきが生まれることもあるんですよ。

ハル:なんと柔軟な！ こんな会社初めてです(笑)。言われてみればこのインタビュー連載も、もとはといえばお酒の席で冗談まじりに話していたらいつのまにか決まって...ごほごほ。御社のセラミック砥石には、どんな特徴があるんですか？

岡田:セラミック砥石は砥粒ではなくセラミックの繊維を使用したFRPなので、折れない・割れない・欠けない・成形できる(形を自由に換えられる)という特徴があります。スティックタイプと丸棒タイプがあります。この技術を発展させてブラシも開発し、バリ取り・研磨の自動化を可能にするツールの開発をしています。自動車業界や航空機業界をはじめ、機械加工を手がける分野で幅広くお使いいただいています。

ハル:御社が特許を取得している技術ですね。セラミック砥石を線材にしてブラシ状にしているとか...

佐藤:そうですね。セラミックファイバーを砥材とし、砥粒は一切含みません。このため切れ味が最後まで変わらず、またブラシ形状も変わらないのでバリ取り・研磨能力が安定持続するのです。ファイバー1本につき、1000本のセラミック繊維を樹脂で固めてあります。

ハル:言うなれば、カニカマボコみたいな構造なんですね。

岡田:高速加工により短時間でバリが取れ、ナイロンブラシの10倍程度の速さで完了します。面を磨いてきれいにする効果もあるんですよ。安定して加工できるので、バリ取りの自動化にも大きく貢献しています。

住吉:私が入社した当時、アジア帯では「バリ取りの自動化」などと言っ

ても、ほぼ受け入れられなかったんですよ(笑)。ただ従来のような人海戦術では人件費がかさんだり、加工品質が安定しなかったりで、今後は自動化を視野に入れる企業も増えていくのではないかと考えています。

ハル:そうになったら、御社の製品はますます需要が高まりそうですね。でもいろんな分野からニーズがあると、対応するのも大変そう...

岡田:今も、ユーザから新たな要望をいただいたときは、社に持ち帰ってニーズに合うように開発を続けていますよ。デモ機をユーザに貸与して試していただくこともあります。

今後の展望は？

住吉:今の工具でできることを、今後いかに広げていくか。ツールで取れるバリの大きさも限られていますから、考えられる点としては、使い方の工夫をして加工の巾を広げること、この素材を使った異なる形状の製品の開発、セラミック以外の素材も模索すること、などが挙げられます。バリ取りに携わるユーザすべてのニーズを100%とすると、わが社が解決できているのはまだまだ数%です。「世界中のバリ取り問題を100%解決すること」を目標に、これからも良い製品づくりに努めていきたいですね。

取材のあとのお楽しみ♪

私が蒲田に行ったときに必ず立ち寄るのが「ニイハオ」。羽根付き餃子の元祖と言われている中華料理屋さんです。ニイハオの店主さんが今から35年前に、中国・大連の焼き肉まんをヒントに作ったのが始まりとか。いい意味で雑然とした、ワイワイ活気あふれる店内で、青島ビールと炒め物、もちもちの水餃子や点心、そして目当ての羽根付き餃子♪調子に乗って紹興酒にも手を出してしまったので、今回もほろ酔い(?)で帰路につきました。JR蒲田駅の発車メロディはおなじみ「蒲田行進曲」だけど、極めて危なっかしい千鳥足なので階段から転げ落ちないように気をつけなきゃ(汗)。

こんなモノ
★見つけました★



シャープンに見えて、実は！

一見、何の変哲もないシャープペンシルに見えますが、カチカチとノックしてみると、出てきた芯はなんとセラミック砥石！製図用ペンシルで使えるジーバックさんの製品なんです。胸ポケットにさりげなく挿しておいて、小さなバリを見つけたらササッと取ることもできますね。一度やってみたい！